北海道農村住宅における接客重視から家族生活重視への空間変容

—移住村（北海道栗沢町砺波地区）と母村（富山県砺波市）の比較—

THE CHANGES OF SPACIAL TYPE OF FARMHOUSE IN HOKKAIDO
FROM MAKING MUCH OF CEREMONY FOR FAMILY LIFE—Comparison between the dwellings of immigrated village “Kurisawachyo-Tonami,
Hokkaido” and that of original village “Tonamishi, Toyamaken”—

住谷 浩*

Hiroshi SUMIYA

Since Meiji era, the people who came from Tonami region of Toyamaken immigrated into Kurisawachyo-Tonami district of Hokkaido. They combined their cultures and formed their ways of living in Hokkaido. The purpose of this study is proving the successions and changes of traditional spacial type of dwellings from the point of comparison between that of immigrated village “Tonami, Kurisawachyo” and that of original village “Tonamishi”. In “Tonamishi”, they succeeded to the dwellings of making much of traditional ceremony up to now. In “Tonami, Kurisawachyo”, though first they succeeded to the traditional dwellings in original village, after World War II, they changed new types of making much of family life.

Keywords: immigrated village, original village, succession, change,
comparison, traditional spacial type of dwellings
移住村、母村、継承、変容、比較、伝統的住空間

1. 研究の目的と方法

本研究の目的は、富山県砺波地方からの団体移民により形成された「北海道空知郡栗沢町砺波地区」の農家住宅と母村「富山県砺波市」の農家住宅を対象に、①移住村の初期住宅における母村継承の実態と、②移住村と母村の近年の住宅における接客空間と家族生活空間の比較から、両地域における伝統的住空間の継承と変容の特徴を明らかにし、③現代北海道農村住宅における接客空間の変容と家族生活空間の改善の特徴を把握することである。

栗沢町砺波地区は、明治26年（1893年）から明治28年（1895年）までの3ケ年に富山県東西砺波郡の11ヶ村の出身者108戸により開拓された地域である。現在（1996年）は、約80戸に減少しているが稲作専業の純農村であり、移住初期から現在まで定住性は高く、同郷性、同宗性（浄土真宗大谷派）による地域の結合力、団結心も強い。

栗沢町の調査は、全戸に対してアンケート調査を実施し、移住時期、出身地、本家・分家関係、住宅更新・改修の実態、現住宅の概要を把握した（回収65戸、1985年6月）。外観・内観の写真記録と現住宅の平面採集を中心に、現存しない住宅についても古老の記憶をもとにし、可能な限り復元記録した（73戸、88例、1985年6-11月）。さらに移住時期から現在までの変化を詳細にとらえるため、移住当

時の団体長の家と明治・大正期に建てられた住宅に居住している初期移住者2戸とその分家5戸の計8戸を対象とする面接記録調査を行った（1985年11月）。またこのうち2戸については、富山県にある本家も調査した（1986年8月）。一方、母村である富山県砺波市については、砺波市に申請された1974-1976年度の建築確認台帳から抽出した、62戸の農家住宅平面資料¹⁾の中から54事例について平面の確認・採集調査を行った（1986年8月）。

2. 移住村の初期住宅における母村継承の実態

栗沢町砺波地区で調査した現住宅73戸の建築時期は明治期（1912年まで）2例、大正期（1913-1926年）2例、昭和20年以前（1927-1945年）7例で、戦前の建築は少なく、62戸が戦後（1946年以降）建替えられている。また戦前の建築であっても、そのほとんどが、屋根、外壁なども含む大規模な改修がなされているため、移住初期の住宅に関しては復元した旧住宅平面（28例）を資料として使用した。

栗沢町における移住初期（1945年まで）の住宅平面と富山県砺波地方の民家平面との比較から、移住村の母村住宅継承の実態を確認する。玉置伸悟氏は、富山県砺波地方の農家住宅を砺波型と分類し、その特徴を次のように解説している²⁾。

* 北海道工業大学工学部建築工学科 助教授・工修

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Hokkaido Institute of Technology, M. Eng.

「・・・完成された型では、ヒロマ、礎座敷2室の他に、座敷上手にザシキノエン（カミシキダイ）が1間幅で張り出すとともに、その奥にヒカエノマが取られる例が多い。・・・」

また大岡敏明氏は氏の著書⁴⁾でわが国の伝統的農家住宅の平面構成を、発展段階（広間空間の変化）と発展系統（座敷構成の相違）の2つのカテゴリーから「前座敷田の字型」「礎座敷田の字型」「前座敷広間型」「礎座敷広間型」の4つの基本型に分類し、伝統的農家住宅の地域の特徴を解説している。この分類に従うと、玉置氏の分類による富山県砺波地方の民家の平面構成は「礎座敷広間型」に属する。

栗沢町砺波地区で採集した戦前（1945年まで）の住宅平面28例中、礎座敷広間型が28例であり、そのいずれもが前掲砺波地方の接客空間の構成をそのまま継承した住宅であった。すなわちヒロマと平ドコ礎座敷を持つ住宅であることを確認した。

現存するK家を事例に、富山県砺波地方の民家が移住地栗沢町砺波に再現されていた事実を詳細に報告する。K家は明治27年（1894年）に富山県砺波郡から団体で移住した。堀立て小屋の仮住まいに始まり、移住から23年後の大正6年（1917年）に、出身母村の住宅と同じ様な住宅を建てている。「オイ」と呼ばれた枠内造りの広間を中心として、上手にオク座敷・クチ座敷の格式空間を、下手に土間、茶の間、流しなどの日常生活空間を設けている。間取りは出身地である富山県の砺波地方と全く同じであった。調査地域のほとんどの住宅は一緒に移住した同郷の大工が施工したと言われていたが、この事例からその事実を確認することができた。天井裏を「アマ」、広間を「オイ（オエ）」、「クチザシキ」、「オクザシキ」などと呼ぶ室呼称にも母村との共通性が認められた（図1）。戦後、南

図1 K家（1971年／栗沢町砺波／復元）

図2 K家（戦後の改築後／栗沢町砺波）

側に僧侶のための控えの間の増築と土間を茶の間に、かつての茶の間を台所に改築するなど、伝統的接客空間の充実をはかる一方で、日常生活空間も改善している。居住者は伝統的格式空間への思い入れを持ってはいるが、冬の寒さと茶の間や台所など日常生活空間の日当たりの悪さを指摘していた（図2）。

3. 両地域における平面構成の変容

大岡氏は、前掲の著書⁴⁾で「・・・わが国の伝統的住宅は、農村住宅においても座敷を中心とした格式空間の形成過程に特徴があり、座敷の発展系列は幕藩体制時代に形成された地域の接客様式を反映している。従って間取りの発展段階は格式空間を充実する方向への変化であった・・・」と指摘している。北海道農村住宅においても、戦前までは格式空間を充実する動きが認められ、同様の方法によって平面構成を分類することは可能である。しかし、戦後は家族生活空間の改善を目的とした変容に特徴がある。大岡氏の座敷の構成を中心とした発展系列のみでは戦後の変容を捉えることはできないため、ここでは新たに接客空間と家族生活空間の比重を分析軸として加え、次のように分類した。

平面構成の基本は、空間の分割方法と発展段階から広間型、田の字型、中廊下型の3つの型に分類することが可能である。しかし両地域の新築住宅をみると、同じ型であっても部屋の配置と家族や客の移動動線から、家族生活に主眼が置かれ計画された間取りと、接客に主眼を置いた間取りがある。家族生活と接客への対応の仕方は、両地域の住宅の違いを示す上で重要と考え、ここでは3つの基本型にこのカテゴリーを加え、次の6つの型に分類した。

	接客重視	家族生活重視
広間型	広間格式型	広間生活型
田の字型	田の字格客型	田の字生活型
中廊下型	中廊下格式型	中廊下生活型

「広間格式型」「田の字格式型」は伝統的な広間型、田の字型である。広間型の広間が、もしくは田の字を構成する空間の1室ないし2室が居間、食事室など家族生活の中心となる空間に変わったものを「広間生活型」もしくは「田の字生活型」とした。北海道の住宅に多い居間中心型と呼ばれた住宅の大部分はこの型に属する。ワンルームのLDKに座敷が付くものを「広間生活型」（図3）、居間とDKを何らかの形で分離し、接客を重視したものを「田の字生活型」として分類した（図4）。

砺波市の新築住宅の大部分は、中廊下を挟んだ一方に広間型もしくは田の字型の接客空間を存続し、他方に家族生活の中心となる居間と食事室を確保している。このような平面形式を「中廊下格式型」とした（図5）。

「中廊下生活型」は「広間生活型」「田の字生活型」が拡大した形で、中廊下を挟んで、一方に家族生活の中心となる食事室、居間と座敷、他方に家族の私室を確保している。家族のプライバシー確保を優先させた公私室型住宅である。伝統的な格式空間はなく、接客は居間とそれにつながる座敷で対応している。分析資料において該当する住宅は栗沢町の1例（図8参照）のみであつたが、他の調

査結果⁹⁾から、北海道の農村住宅の規模が拡大するに従って増加する型であることが推察された(図6)。

図3 広間生活型(1970年/栗沢町砺波)

図4 田の字生活型(1975年/栗沢町砺波)

図5 中廊下格式型(1974年/砺波市)

図6 中廊下生活型(1979年/北海道端野町)

両地域における新築住宅の平面構成を比較すると、栗沢町においては、「広間生活型」が主流であるのに対し、砺波市においては「中廊下格式型」が主流である。砺波市の古い住宅が広間もしくは田の字の格式型であったことは前掲玉置氏の研究からも明かである。伝統的接客空間を存続しながら、家族生活空間を改善する方法として、「中廊下格式型」を採用したものと推察される⁹⁾。

栗沢町の住宅についてみると、戦前(1945年まで)は「広間格式型」、戦後前期(1946-1965年)は「中廊下格式型」、戦後後期(1966-1975年)は「広間生活型」と時期を画して明確に変化してきたことがわかる(表1)。

表1 平面構成(型)別事例数

平面構成(型)	砺波市 (建築時期)	栗沢町 (建築時期)		
	1974-1976	- 1945	1946-1965	1966-1975
広間格式型	-	17	3	-
広間生活型	-	-	4	18
田の字格式型	-	-	3	-
田の字生活型	-	4	2	1
中廊下格式型	50	7	12	3
中廊下生活型	1	-	1	1
その他	3	-	-	-

4. 接客空間の継承・変容と家族生活要求への対応

住宅の規模と室構成から近年における両地域の接客と家族生活への対応の違いを総合的に把握する。室構成については居間、台所・食事室、寝室など家族が主に使うことを意図した部分を家族生活空間とし、広間や座敷とそれにつながる縁などの格式空間と応接間などの接客目的でつくられた部分を接客空間とした。栗沢町の住宅において、居間は家族生活ばかりではなく接客にも対応しているが、ここでは家族生活空間として扱った。また、砺波市では居室数が多く、家族の寝室数を大幅に越えている住宅が多くみられたが、格式空間を構成する室以外は家族生活空間として扱った。従って日常的に使用されている家族生活空間は資料化した面積よりは少ないと考えられる。

4-1. 室構成別平均床面積

表2は砺波市と栗沢町の近年建替えられた住宅(以降新住宅と呼

ぶ)の室構成別平均床面積を示したものである。ここで用いた事例(サンプル)数は砺波市は建築時期が1974年から1976年の住宅平面54例、栗沢町においては、変化を把握するために、平面採集した88事例の中から不明箇所の多い12事例を除く76例を建築時期別に整理したが、比較対象とした住宅は戦後後期(1996-1975年)に建替えられた23例である。

延べ床面積についてみると、栗沢町の新住宅(1966-1975年)の平均148.4㎡に対し、砺波市の新住宅の平均は232.1㎡とその差は著しい。家族生活空間を比較すると、栗沢町の平均83.1㎡に対し砺波市の平均は97.0㎡であり、やはり砺波市が平均で約14㎡多い。しかし、砺波市では普段使用していない居室が多く、実質的な家族生活空間面積はこの数値より少ないことは確かである。家族の寝室以外の使用、すなわち盆、正月などの年中行事や結婚式や葬式などの通過儀礼の時、客の宿泊や儀礼の準備を行う部屋として準備されていることが推察される。

接客空間の面積を比較すると、栗沢町の平均24.1㎡に対し砺波市の平均は68.8㎡とその差は著しく、居室の用途も含め考えると、実質的にはこの差はさらに広がる。すなわち両地域の住宅は、接客に対する空間対応に著しい違いのあることがわかる。

4-2. 接客空間の構成

表3は両地域における接客空間の室数別・構成別事例(サンプル)数を示したものである。使用した事例は表2と同じである。前述したように、砺波地方の伝統的接客空間の構成は座敷系が主流であり、広間、前座敷、奥座敷、控の間などの構成に特徴がある。移住村の栗沢町においても、移住初期(1945年まで)の住宅はこの形式を継承していた。しかし両地域の新築住宅を比較すると接客空間の構成に著しい違いがある。接客空間の平均床面積に大きな差があることは前項で示したが、室数で見ると砺波市が3室(22例)、4室(17例)が中心であるのに対し、栗沢町(1966-1975年)は1室(13例)、2室(10例)で3室以上確保する住宅はない。

次に接客空間の構成をみると砺波市においては広間、座敷、控の間、縁など、伝統的接客空間の形式を新住宅においても存続している。しかし栗沢町においては、接客空間の縮小が著しく、戦前までの住宅にみられた接客空間の構成とは著しい違いがある。新住宅では、家族が普段生活している居間に接続して座敷を設ける例が殆どであり、縁側のような広い開口はない。栗沢町において、接客に対する空間対応が戦後著しく変化したことがわかる。

砺波市の新住宅54事例中22例に応接間があり、4割にも達している。多くが板敷で応接用の椅子が置かれ、椅子式生活を導入している。伝統的接客空間を存続しながら一方で、新しい要求に対応する方法として応接間を設けていることが推察される。

4-3. 家族生活への対応

表4は居間、食事室、台所のつながり方別、居間と座敷の関係別、寝室として使用する部屋数別の事例(サンプル)数を示したものである。ここでも表2、表3と同じ事例を使用した。両地域とも家族の集まり部屋として専用の居間や食事室を確保している。砺波市は「L+DK型」が殆どである(48例)。栗沢町においては、「L+DK型」(11例)と「LDK型」(12例)に分かれる。「LDK型」は北海道において戦後都市農村問わず急激に増加した型である。この型は農村においては接客時の不満が多く、近年は「L+DK型」が増加

表2 室構成別平均床面積と面積構成比

室構成別 平均床面積 (面積構成比)	砺波市 (建築時期)	栗沢町 (建築時期)		
	1974-1976	-1945	1946-1965	1966-1975
延床面積(㎡) 構成比(%)	232.1 (100.0)	148.3 (100.0)	144.6 (100.0)	148.4 (100.0)
接客空間面積(㎡) 構成比(%)	68.8 (29.6)	58.4 (39.4)	42.3 (29.2)	24.1 (16.3)
家族生活空間面積(㎡) 構成比(%)	97.0 (41.8)	55.5 (37.4)	67.9 (47.0)	83.1 (56.1)
その他の空間面積(㎡) 構成比(%)	66.3 (28.6)	34.4 (23.2)	34.4 (23.8)	41.2 (27.8)

接客空間-広間・座敷・控の間・縁・応接間
家族生活空間-居間・食事室・台所と接客空間以外の居室
その他の空間-玄関・裏口・廊下・階段・浴室・便所・納戸・物置等

表3 接客空間の構成・室数別事例数

接客空間の構成と室数	砺波市 (建築時期)	栗沢町 (建築時期)		
	1974-1976	-1945	1946-1965	1966-1975
座敷	4	1	4	6
広間・座敷	1	3	6	(17)
座敷・縁	12	4	5	-
広間・座敷・縁	7	16	10	-
座敷・縁・控の間	16	-	-	-
広間・座敷・縁・控の間	14	4	-	-
応接間 あり	22	-	-	1
なし	32	28	25	22
接客空間の室数 (応接間を含む)	1室 - 2室 8 3室 22 4室 17 5室 4 6室 2 7室 1	1 8 14 5 - - -	3 14 6 2 - - -	13 10 - - - - -

() 付数字は広間家族生活型の居間・座敷を示す。

表4 LDKの構成・部屋数別事例数

家族生活空間の構成と室数	砺波市 建築時期	栗沢町 建築時期		
	1974-1976	-1945	1946-1965	1966-1975
LDKの構成				
L+D+K	1(1)	-	-	-
L+D+K	4(4)	26	13	-
L+DK	48(47)	1	6	11(1)
LDK	1(1)	1	6	12(0)
居間と座敷の関係				
連続	-			19
分離	54			4
私室等の部屋数				
1室	-	7	-	-
2室	3	10	5	2
3室	4	8	10	2
4室	13	3	7	10
5室	13	-	3	8
6室	13	-	-	1
7室以上	8	-	-	-

LDKの構成で()内数字は、居間の床が畳敷のサンプル数を示す。
私室等の部屋数は、居間、食事室、接客空間以外の居室数。

しており、「LDK型」は暖房効率を優先させた過渡期の型として捉えることが妥当と思われる⁹⁾。

「LDK型」は椅子式生活を前提にしたダイニング・キッチンと、居間が分離した型である。居間の床仕上げは、畳敷の砺波市に対し、栗沢町は板敷きで椅子式生活を前提につくられている。栗沢町の場合、この居間につなげて座敷を設ける例が多い(19例)。この場合、座敷での接客には必ず居間も関係する。従って座敷の格式性は低く、伝統的な形式に則った儀式、接客を住宅で行うことはできない。結婚式や葬式など多人数接客の施設利用など地域社会の儀式や接客慣行は確実に変容しており、家族生活優先の住宅を前提にした新しい儀式形態・接客慣行が一般化していることを意味している。

一方砺波市の住宅は、広間や座敷を中心とした接客空間と、家族の団らんに対応するダイニング・キッチンや居間を、廊下等によって明確に分離し、伝統的な儀式や接客慣行が家族生活を疎外することなく行えるようにしている。広さから推察すると、栗沢町と同じように日常的には接客も含め、ダイニング・キッチンと居間で十分に対応できると思われる。家族生活空間と接客空間の配置や規模、動線計画をみると、接客優先の計画であり、地域社会において伝統的な格式意識、接客慣行が現在も存続していることがわかる。

図7 栗沢町K家の本家(1956年建替/砺波市)

図8 H家の新住宅(1975年/栗沢町砺波)

部屋数から判断すると両地域とも専用の寝室を確保することは容易である。家族構成を老夫婦、夫婦、子供(2-3人)の6-7人家族を想定しても必要な寝室数は4-5室で足りる。栗沢町は4室(10例)5室(8例)が中心であり、想定した家族構成に対応している。砺波市は4室13例、5室13例で、6室以上が21例もある。寝室として使用する以外の部屋には、客の宿泊や儀式を行うための控え室などの目的があることが推察される。

両地域における接客と家族生活への空間対応の違いを典型事例で示す。図7は前掲K家の母村にある本家の住宅である(1956年建替)。茶の間や台所などの日常生活空間と格式空間を中廊下で分離した大規模な住宅であった。格式空間は、枠内造りの広間を中心にして、上手に奥座敷、マエ座敷、控えの間などの伝統的な形式をそのまま継承していることがわかる。昭和55年(1980年)、マエ座敷・奥座敷・ヒロマに約70人の客を招待し、結婚披露宴を行ったが、それ以降は調査時点の1986年まで使う機会がなかったらしい。冠婚葬祭などの多人数接客を自宅で行う家は砺波市でも少なく、広間を含む伝統的接客空間を使う機会は減少しないにもかかわらず、住空間の地域的型として現在も継承されている。格式空間を南側にし、茶の間、台所などの日常生活空間を北側に配置する空間構成は昔と同じであり、現在もなお、格式を重視する意識が伺われる。しかし、台所・茶の間・寝室などの日常生活空間も確実に充実してきており、伝統を継承しつつも、家族の生活への配慮がみられた。

図8は栗沢町砺波に昭和50年(1975年)に建て替えられたH家の住宅である。H家は団体長として移住している。椅子式の生活を前提にしたダイニング・キッチンと居間を中心とし、居間につながる座敷を持つこの構成は、都市農村を問わず昭和40年以降全道的に普及した平面形式である。格式空間としての続き間座敷はなく、2階に家族の寝室を設けており、それまでの接客中心の平面から、家族生活を中心にした平面に変化していることがわかる。

栗沢町の住宅は接客空間を縮小し、家族生活空間の充実をはかっている。一方母村砺波市の住宅においては伝統的接客空間を存続しながら、家族生活空間を改善している。寝室の確保や食事・団らんなど家族生活空間の改善は古い型の農村住宅の課題であった。この課題への対応の方法が両地域の住宅規模の差や平面構成の違いとなっていることがわかった。

5. まとめ

戦前までは同じ型の住宅を継承していた両地域において、戦後は接客空間の構成に著しい違いが認められた。砺波市では新しい住宅においても伝統的接客空間を継承しているのに対し、栗沢町においては家族生活を優先する住宅に変わっている。戦後の家族生活におけるプライバシーの確保や椅子式生活の導入などの要求は、程度の差はあれ地域を問わずおこっており、それぞれの条件にあわせて個々の家が対応していると思われる。しかし、日常的な接客も含め、年中行事や通過儀礼は地域社会の接客慣行と密接な関連を持つ。従って接客空間の構成は住空間の地域的型を示していると考えることができる。砺波市では伝統的接客空間を存続しながら住宅全体の規模を拡大することによって家族の日常生活空間を確保する方法を選択していたのは、伝統的家意識や社会秩序が色濃く残っていることを意味している。一方、栗沢町においては家族生活空間を最優先さ

せた住宅に変わっている。戦後の北海道農村住宅と住生活の変容過程の詳細については稿を改めて報告する予定であるが、戦後一般化した新しい接客慣行が現代北海道農村住宅の平面構成に強い影響を与えていることがこの研究で確認することができた。

(謝辞) 本研究をまとめるにあたり貴重な助言をいただいた北海道大学工学部建築工学科眞嶋二郎教授、野口孝博助教授に深い感謝の気持ちを込めてお礼申し上げます。

注

- 1) 社会学者宮良高弘氏(札幌大学教授)は、文献1)で、明治以降に形成された北海道の村落社会の形態を、母村文化を担った人々の移住定着過程の時間的ズレと、移住人口量を基準とする方法によって「同一母同時型」、「同一母継時型」、「二異母村同時型」、「二異母村継時型」、「多異母村混合型」の5つの型に分類し生活文化の特徴を論じている。その中で栗沢町砺波地区を「同一母村同時型」から「同一母村継時型」の流れの中に位置し、母村文化を継承した村落の事例として取り上げている。
- 2) 追跡調査を行うための基礎資料として、「比較分析法による北海道農村住宅に関する研究(資料編)」(田中繁樹、村上孝一、北海道工業大学卒業論文、1977年3月)砺波市の農家住宅平面図62例(1974-1976年度の確認申請図)を使用した。
- 3) 玉置氏は文献2)で次のように解説している。①原型は二ワ、ヒロマの2室、あるいはこれに座敷がついて3列、現在でもこの部分のみが主屋でサス構造部分。②充実するに従いヒロマの後ろにオロシと呼ばれる下屋が主屋の後部全部に張り出す。このオロシ部分は元々はナンドであった部屋はナカノマとしてのこるために、ヒロマ後部のチャノマは二ワ部分に張り出すことになる。ヒロマが格式空間化するにつれ、チャノマは家族の居間になる。居間の下手にダイドコロがあり、ナガシが儲けられる。ヒロマ上手に座敷がくる。この座敷はヒロマと食い違っており、鍵座敷、続き間を構成する。越中型と著しく異なる点の一つは越中型では裏ドコ前座敷であるのに対し、砺波型では座敷が必ず平ドコ鍵座敷となる点である。砺波型において元来はヒロマ後部にあったナンドは、完成された型ではザシキ後ろのオロシ部分にヘヤ(ナンド)として取られる。③完成された型では、ヒロマ、鍵座敷2室の他に、座敷上手にザシキノエン(カミシキダイ)が1間幅で張り出すとともに、その奥にヒカエノマが取られる例が多い。また、越中型と異なり、来客はヒロマから入る。さらに上客はカミシキダイ(ザシキノエン)から入る。従ってヒロマにはシキダイあるいはエンが張り出すことになる。
- 4) 文献3) 参照

- 5) 文献4) 第4章(pp47~97)の1950年、1974年、1980年、1991年の4時点にわたって同じ農家を追跡した調査資料において、戦前(1950年調査)は、わが国の伝統的な「広間型」や「田の字型」の平面構成が主流であったが、戦後(1974年調査)は「広間型」の広間や「田の字型」の1室ないしは2室を居間や台所にした住宅が増加していることがわかる。北海道では「居間中心型」とも呼ばれているこの型の住宅を本論文では、農家住宅の変容の地域的比較をするために「広間生活型」「田の字生活型」として分類した。さらにその後の調査(1980年、1991年調査)においては、規模の拡大とともに居間とそこにつながる座敷が充実する一方で家族のための専用の寝室を確保する住宅が増えている。寝室・老人室・子供室などの私室と居間・食事室・座敷など家族のあつまり部屋や接客などを目的とし公室をホールや中廊下で明確に分離した公私室型住宅への変化である。このような住宅を本論文では「中廊下生活型」として分類した。
- 6) 玉置氏は文献2)で砺波地方の農家の増改築・新築住宅の特徴を次のように指摘している。「二ワ空間の広い砺波型の増改築では、二ワの床上げ・居室及びそれに伴う通路空間の確保などが盛んに行われている。この居室はチャノマ(イマ)や応接間として使われる場合が多く、通路空間は玄関からチャノマまで伸び、さらにオクザシキとダイドコロを結ぶ廊下へと発達するものもみられる。それだけヒロマ・ザシキの表(ハレ)部分とダイドコロ、ヘヤなどの裏(ケ)部分との分節意識の強いことを反映している。新築住宅においてもこの傾向は認められる。・・・」

参考文献

- 1) 宮良高弘：北の民俗学、雄山閣出版、pp.12~20、1993年
- 2) 玉置伸信：北陸地方における農家住宅の変容過程に関する研究、財団法人住宅総合研究財団、pp.129~135、1992年
- 3) 大岡敏昭：旧藩領域からみた農家住宅の地域的相違と歴史的発展過程に関する実証的研究、財団法人住宅総合研究財団、pp.1~8、1988年
- 4) 足達富士夫、住谷浩、野口孝博：北海道農村住宅変容史の研究、北海道大学図書刊行会、1995年
- 5) 住谷 浩、加藤慶子：北海道農村住宅の変容過程に関する研究Ⅲ－栗沢町砺波地区における事例研究、北海道工業大学研究紀要15号、pp.155~166、1987年
- 6) 住谷浩：北海道の住宅と住様式(第3章 農村の住宅)、pp.153~205、北海道大学図書刊行会、1982年
- 7) 本田栄作：至誠一貫、故本田栄三郎翁伝記発刊委員会、1978年
- 8) 宮良高弘編：むらの生活－富山から北海道へ、北海道新聞社、1988年

(1997年1月6日原稿受理、1997年2月25日採用決定)